HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	リサーチ・アシスタント(RA)成果報告書
Citation	研究論集, 25, 323（左）-331（左）
Issue Date	2026-01-16
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98780
Type	other
File Information	19_rjgshhs_25_p323-331_l.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

リサーチ・アシスタント(RA)成果報告書

文学研究院研究プロジェクト「人文学と社会」について

文学研究院研究プロジェクト「人文学と社会」は，博士後期課程の学生をリサーチ・アシスタントとして採用することにより，学生を経済的に支援し，博士論文の早期提出および内容の充実を図るとともに，学生の研究環境の充実および若手研究者としての研究遂行能力を養成することを目的としています。

文学院には，令和６年度，182 名の博士後期課程の大学院生が在籍し，そのうち７名がリサーチ･アシスタントとして独自のテーマについて研究を進めてきました。その研究テーマ一覧と，１年間の研究成果の概要報告を，『研究論集』の資料として掲載しています。

研究テーマ一覧

令和６年度

氏　　名	研　究　テ　ー　マ	頁
榎　本　歩　美	馬介在療法における北米先住民と固有種馬の関係性に関する文化人類学的研究	325
王　　泰　睿	中国第六世代映画監督賈樟柯の作品における金銭の表象に関する研究	326
郭　　如　梅	キャラクター消費による女性同性愛表象の表現機構 ── 2010 年代の専門誌『コミック百合姫』の関連作品を中心に	327
金　　雲　龍	ピーター・シンガーの立場からの感情と直観の位置づけ：ジョナサン・ハイトとジョシュア・グリーンを中心に	328
張　　力　丹	日本語モダリティの統語語用論的研究 ──「ものだ」「ことだ」「わけだ」の比較を通じて ──	329
沈　　嘉　琳	『1Q84』と村上春樹の翻訳作業	330
趙　　文　軒	武田泰淳論 ── 第一次戦後派における日中戦争	331

研究成果の概要

研究テーマ	**馬介在療法における北米先住民と固有種馬の関係性に関する文化人類学的研究**
RA氏名	榎本歩美（えのもと あゆみ）
専攻・研究室・学年	人文学専攻　文化多様性論講座　文化人類学研究室 博士後期課程２年
指導教員氏名	山　口　未花子

研究成果の概要

カナダ先住民社会では植民地支配の同化政策に由来するトラウマや，今も続く差別や抑圧により貧困や暴力，健康被害が深刻な問題となっている。その治療の一つとしてオジブウェ・ホースによる馬介在療法が注目されている。オジブウェ・ホースは過去に五大湖地域のオジブウェに季節的な労働力として用いられたが，植民地支配時の殺処分により関係は途絶えた。先住民の健康問題に関する人類学研究では，人間と自然の関係性が治癒や回復に有効であることが示されているが，「人間の健康に役立つ動物」という視点は未だ中心的で動物が受ける影響は注目されていない。本研究では，文化人類学における人間中心主義・西洋医学中心主義の脱却を目指し，先住民の動物観に基づく先住民と馬及び自然の諸存在の相互作用による回復力の生成・促進を明らかにすること目指す。

調査方法は，オジブウェに関する過去の民族誌と動物介在療法に関する文献調査，馬介在療法プログラムを実施する施設での聞き取りと参与観察に基づいてデータを収集する。

研究成果は次の三点である。まず，文献調査からオジブウェ・ホースの歴史と現状について把握した。馬は1960年代まで半野生で生息し，五大湖周辺地域の先住民と季節的な共生関係にあったこと，1940年代後半に始まる宣教師の到来に伴う数の減少，殺処分による絶滅危機の現況と北米での保護の状況を整理した。また，先住民の馬介在活動を通して断絶された関係の再構築が進んでいることを把握した。二点目は伝統的な医療とオジブウェの動物観の関連である。過去の民族誌の調査から，伝統医療において動物は多くの役割を保持し，健康と幸福のためには人間と動物を含む非人間の関係性が重要であると考えられていることが分かった。三点目は「治癒者としての馬」の認識について，セラピープログラムの代表者である先住民女性へのインタビューから検討を行った。馬は人間の健康のための道具ではなく治癒を与える存在であり，常に敬意と感謝を持って接していることが明らかとなった。以上の点を踏まえ，さらに具体的な馬と先住民の相互的なケアによる植民地支配からの回復について明らかにすることを今後の課題とする。

研究テーマ	中国第六世代映画監督賈樟柯の作品における金銭の表象に関する研究
R A 氏名	王（おう）　泰睿（たいえい）
専攻・研究室・学年	人文学専攻　映像・現代文化論研究室　博士後期課程 2 年
指導教員氏名	応　雄

研究成果の概要

【研究目的】

本研究は，中国第六世代の映画監督である賈樟柯（ジャ・ジャンクー）の映画作品における金銭の表象を考察することを目的とする。具体的には，以下の二つの点に焦点を当てる。第一に，賈樟柯の初期作品において，物語や映像表現の中で金銭がどのように描かれているかを明らかにし，特に素人俳優の出演との関係に注目する。第二に，これらの映像分析をもとに作品間の比較を行い，「作家論」の視点から考察を試みる。

【研究計画】

前期では，賈樟柯の長編映画デビュー作『一瞬の夢』（1997）における「金銭」の表象と，素人俳優の演技を分析する。また，賈樟柯の作家性の一側面である長回しのカメラワークに着目し，『プラットホーム』（2000）や『青の稲妻』（2002）にも言及しながら，初期作品における素人俳優による「歌唱」シーンにおける身体と金銭との関連性を考察する。

後期では，『長江哀歌』（2006）を分析対象とする。本作では，長江という水の環境を背景に，賈樟柯の初期作品に見られる「身体と金銭の交換」というテーマが，「筋肉と金銭の交換」として描かれている。特に，労働者の肉体運動を捉えた映像表現に注目し，その描写がどのように金銭との関係性を示しているのかを考察する。

【研究成果】

前期の成果として，賈樟柯の映画における香港映画の「音声の引用」がもたらす問題を指摘し，素人俳優による歌唱シーンの感動を肯定的に評価した。また，初期作品における「鈍感」な歌唱や行動を分析した。本研究成果は，中国・北京大学で開催された国際学会「International Doctoral Student Forum of Art Studies 2024」にて口頭発表を行った。

後期の成果として，賈樟柯の初期映画における「ロマン化された身体」が「筋肉映画」へと変化し，筋肉と金銭の交換を通じて暴力性が露呈することを明らかにした。本研究成果は，香港中文大学で開催予定の国際学会「Young Scholars' Forum in Chinese Studies 2025」にて口頭発表を行う予定である。

これらの研究成果は，博士論文の一章として組み込む予定である。

研究テーマ	**キャラクター消費による女性同性愛表象の表現機構** ――2010年代の専門誌『コミック百合姫』の関連作品を中心に
RA氏名	郭（クオ）　如梅（ルー　メイ）
専攻・研究室・学年	人文学専攻　映像・現代文化論研究室　博士後期課程3年
指導教員氏名	押野武志

研究成果の概要

本研究はなもり『ゆるゆり』及び派生作品『大室家』を研究対象として，キャラクター消費の受容からうかがうことのできるレズビアン・セクシュアリティ表象の変容に着目し，2010年代の〈百合〉表象の構造を解明する。

従来のオタク論では，キャラクター消費は性差によって二分化され，「データベース消費」は男性向けで，「相関図消費」は女性向けと捉えられている。しかし，男性読者を想定する『ゆるゆり』では，データベース消費と相関図消費の混在によって，男性向け／女性向けのジェンダー・カテゴリーの境界線が揺れている。また，『ゆるゆり』は「相関図消費」を優先的に用いて，登場人物の妄想に伴い，読者の二次創作を積極的に喚起し，数多くのレズビアンの恋愛関係を作り上げる。

掲載誌『コミック百合姫』の編集部の言説と重ねれば，「相関図消費」などのキャラクター消費は，セックスやジェンダーとは関係なく，読者が習得することができる消費行動であることが示されている。このように，本研究において従来のオタク論における性別の本質化や男女の二項対立の再強化などの問題点を洗い出した。「男性向け／女性向け」，「データベース消費」と「相関図消費」の二項対立は，読者に要請されるジェンダー規範であることも明らかにした。それを踏まえ，〈百合〉表象は男性オタクが女性キャラクターを所有しようとする攻撃的なポジションから逸脱する可能性を提示した。また，〈BL〉と比較すれば，〈百合〉は「攻め／受け」という役割分担の紋切り型を撹乱した。「攻め／受け」の交換可能性により，〈百合〉の「相関図消費」は数多くの女同士のカップリングとレズビアンの恋愛物語が生産されている。

このように，『ゆるゆり』は作品外部における男性向け／女性向けというジェンダー・カテゴリーの規範性の露呈，作品内部における「データベース消費」と「相関図消費」の混在，「攻め／受け」の流動化を通じ，〈セックス／ジェンダー／欲望〉の首尾一貫性を撹乱しながら，多様な選択の可能性を明確に示した。この意味で，『ゆるゆり』はオタク文化のセクシュアリティの多様性に貢献した作品と位置付けた。

研究テーマ	**ピーター・シンガーの立場からの感情と直観の位置づけ**：ジョナサン・ハイトとジョシュア・グリーンを中心に
R A 氏名	金（キム）　雲龍（ウ ニョン）
専攻・研究室・学年	人文学専攻　博士後期課程 3 年
指導教員氏名	藏　田　伸　雄

研究成果の概要

本研究の目的は，ピーター・シンガー（Peter Singer）の道徳的正当化理論において，直観（intuition）と道徳的判断（moral judgment）の関係を分析することである。シンガーは直観的判断が道徳的正当化の根拠になることはできず，理性による合理的な正当化が必要だと主張する。しかし，道徳的判断から直観が完全に排除できるのかについての議論が必要である。したがって，本研究は，シンガーが直観をどのように解釈し，道徳的判断においてどのような役割を与えるかを分析し，彼の道徳的正当化理論をより体系的に理解することを目的とする。

本研究は三つの段階で行われる。まず，シンガーの道徳的正当化における直観の位置を分析する。彼は功利主義を提唱し，直観を超える合理的な正当化が必要だと主張する。第二に，道徳的判断における直観の機能を実証的研究と比較する。ジョナサン・ハイト（Jonathan Haidt）とジョシュア・グリーン（Joshua Greene）の研究を通じて，実際に直観が人間の道徳的判断にどのように作用しているかを提示し，シンガーの直観批判が現代の道徳心理学とどのように調和するか，または衝突するかを分析する。第三に，シンガーの道徳的判断理論が感情（emotion）と共感（empathy）をどのように扱うかを検討する。

本研究を通じて，シンガーの道徳的正当化理論において直観が占める位置をより明確に明らかにすることができる。第一に，シンガーが直観を排除しようとするが，実質的にこれを完全に超えることは非常に難しいことである。第二に，最近の道徳心理学研究と比較し，彼の立場が現代倫理学的議論とどのように調和できるかを分析する。第三に，感情と共感の役割を考慮し，シンガーの道徳的正当化理論を補完できる可能性を探る。その結果，シンガーによれば，ハイトとグリーンの研究は，人々が実際にどのように道徳的判断を下すかを説明することはできるが，どのような道徳的判断が正しいかを決定することとは区別される。道徳的判断の心理的プロセスと道徳的正当化（normative justification）は区別されるべきである。道徳的判断が単なる感情的な反応ではなく，普遍的な原則と理性的思考を通じて正当化されなければならない。

研究テーマ	日本語モダリティの統語語用論的研究 ──「ものだ」「ことだ」「わけだ」の比較を通じて──
RA氏名	張（ちょう）　力（りき）　丹（たん）
専攻・研究室・学年	人文学専攻　言語科学研究室　博士後期課程3年
指導教員氏名	加　藤　重　広

研究成果の概要

研究目的：

客観的な事柄を表す要素である「命題」と，主観的な態度・判断を表す要素である「モダリティ」は，文を構成する二大要素とされている。モダリティを表す形式のうち，形式名詞に由来して新たな意味用法を派生した言語形式は比較的注目を浴びていないようである。品詞性や意味用法，従属節での出現，ほかのモダリティ助動詞との複合など，様々な課題を残している「ものだ」「ことだ」「わけだ」を研究対象とする。それらを検討することで，モダリティの定義や範囲，体系化など本質に関わるものを考え直す。

研究計画：

形式名詞とコピュラの「だ」が結合してできた点で共通している「ものだ」「ことだ」「わけだ」を，①助動詞として認定可能か否か，②コピュラを伴わずに文を完結させる現象，③それぞれの否定表現及び否定表現間の相違点，といった3つの側面より展開していく。

研究成果：

①活用体系を持つかどうかを助動詞の認定にあたってのキーポイントだと考えられる。実例に合わせて考察したところ，いずれも規則的な活用体系を持つため，三者とも助動詞と認められる。②コピュラを伴わずに文を完結させる「もの」「こと」「わけ」について品詞性や意味用法などを考察したところ，「もの」と「こと」は，いずれも終助詞としての用法があるのに対して，「わけ」は助動詞の「わけだ」と形態的に分離しておらず自立性が弱いため，文を完結させる機能を有するものの，終助詞として認め難いことがわかった。③「ものだ」「ことだ」「わけだ」の否定表現に関しては，助動詞の未然形に由来する「もので（は）ない」「ことで（は）ない」「わけで（は）ない」と否定辞が先行する「ないものだ」「ないことだ」「ないわけだ」という2種類がある。両者の異なりについて，「もので（は）ない」「ことで（は）ない」「わけで（は）ない」は全体的にモダリティレベルに入るのに対して，「ないものだ」「ないことだ」「ないわけだ」は，「ものだ」「ことだ」「わけだ」がモダリティを担当する部分であるが，否定辞の「ない」は命題レベルに入ってしまう。

研究テーマ	『1Q84』と村上春樹の翻訳作業
R A 氏名	沈（しん）　嘉琳（かりん）
専攻・研究室・学年	人文学専攻　映像・現代文化論研究室　博士後期課程 2 年
指導教員氏名	押野武志

研究成果の概要

村上春樹は多くのインタビューで，スコット・フィッツジェラルド，レイモンド・チャンドラー，トルーマン・カポーティの三人のアメリカ作家に同時に言及し，自分の一番好きな三人の作家であると明言する。村上は二〇〇六年十一月，およそ三十年間待ち続けた『グレート・ギャツビー』（1925）の翻訳をやっと上梓した後，二〇〇七年三月にチャンドラーの『ロング・グッドバイ』（1953），二〇〇八年二月にカポティの『ティファニーで朝食を』（1958）と，三人作家の代表作の新訳版を連続して出版した。本研究は『1Q84』（2009，2010）の創作背景として，村上春樹が愛読し，影響を受けた三人の作家の代表作を一気に翻訳した事実から出発し，村上春樹の翻訳作業の視座から青豆を中心に『1Q84』を解読する試みである。

『1Q84』での青豆と青豆にまつわる人物の描写では，トルーマン・カポーティの作品におけるイノセントなものへの志向と，レイモンド・チャンドラーのハードボイルド小説との類似性と相違点がみられる。さらに，スコット・フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』の名場面を取り入れつつアレンジを施し，青豆を目的達成へと導く。

作家天吾の年齢は，村上が小説家デビューした時の年齢と同じである。また，天吾が『空気さなぎ』の書き直しをきっかけに新しい創作を始めることも村上が最初に英語で文章を書いた後，日本語に訳す形で小説を書き始めたこと一致する。天吾には村上が作家デビューした初期の面影がある。村上のデビュー初期の〈鼠三部作〉における，喪失の経験を繰り返す「僕」は，〈鼠三部作〉の延長線上で書かれた『ダンス・ダンス・ダンス』（1988）では，好感を抱く女性と共に，将来に期待を寄せるようになる，という初期作品群の構図と展開は，『1Q84』でも見受けられる。『1Q84』で特異なのは，他の村上作品とは異なり，「僕」を救い出す女性を重点的に描くことである。そういった青豆の造形の特質を，アメリカ文学作品の翻訳作業と結び付けながら分析する。

研究テーマ	武田泰淳論 ── 第一次戦後派における日中戦争
R A 氏名	趙（ちょう）　文軒（ぶんけん）
専攻・研究室・学年	人文学専攻　映像・現代文化論研究室　博士後期課程 2 年
指導教員氏名	水　溜　真由美

研究成果の概要

本研究は，武田泰淳の戦争および中国に対する関心に着目し，彼の反戦思想と人間観を浮き彫りにすることで，戦後文学における独自性を明らかにすることを目的とする。日中戦争を背景に，武田が抱いた中国へのこだわりを出発点として，〈中国もの〉と呼ばれる作品群を分析することで，戦後の創作と戦争体験との関係を検証したい。

本年度は研究計画に従って，まず「淑女綺談」（『改造』1951 年 5 月号）を取り上げ，これまでの〈上海もの〉に関する研究を踏まえつつ，武田文学における終戦前後の女性人物の描写とその女性観を考察した。次に，「冷笑」（『群像』1951 年 7 月号）と「勝負」（『群像』1952 年 4 月号）という自伝的小説を中心に，インテリ作家としての武田の問題関心に焦点を当て，彼の従軍小説における戦地表象について考察を行った。最後，武田の戦後文学の原点とされる「審判」（『批評』1947 年 4 月号）を対象に，その構造を詳細に検討した。

本研究の成果として，「淑女綺談」に関する論文「武田泰淳「淑女綺談」論 ── 終戦前後の上海における女性表象」を執筆し，『国語国文研究』第 163 号（2024 年 8 月）に掲載した。また，「冷笑」と「勝負」の考察をもとに，令和 6 年度北海道大学国語国文学会大会において「武田泰淳における戦地表象 ──「冷笑」と「勝負」を中心に」と題した研究発表を行い，その成果を発展させた論文「武田泰淳の従軍小説論 ──「冷笑」と「勝負」における戦地表象」が『層 ── 映像と表現』第 17 号に掲載される予定である。さらに，「審判」についての分析に基づき，第 8 回映像・現代文化論学会大会において「武田泰淳「審判」における〈記述行為〉の多層性」というテーマで研究発表を行った。同題の論文を執筆し，『国語国文研究』第 165 号へ投稿した。